

# 金子文子を文学テキストとして再読するために

——手記『何がわたしをこうさせたか』について——

大田 美和

## 序 論

- 1 金子文子とは何者か？
- 2 金子文子のテキストの整備の問題
  - (1) 検閲の問題
  - (2) 栗原一男の編集の問題
  - (3) 手紙の異本と自伝の構想の時期
- 3 文学テキストとしての精読と分析
  - (1) 小袖部落とビタミンと貨幣経済
  - (2) 美江村の鳥瞰図と権力
  - (3) 自殺未遂と腰巻一手記と手紙

## 結 論

## 序 論

金子文子（1903-26）の言葉は、なぜ今も、生きているのか？ 力強い文体の秘密を探りたい。南みち子は、金子文子は、直接的身体的「身体の治療」による暴力行使ではなく、手記という象徴的な思想の表現によって、現在の社会にも影響を持ち続けることになった<sup>1)</sup>と述べている。また、在

---

1) 南みち子「国民国家アイデンティティを乗り越える視点—菅野須賀子と金子文子の事例」、『日本近代文学』71, 2004年, 288。

日朝鮮人二世の李順愛は、金子文子を同志でありパートナーであった朴烈とあえて切り離して、次のように述べる。

しかし、彼女がぎりぎりのところで、自分がなぜ天皇に屈服しないのかを自問した時に、最後の最後に残ったのが、知識などではなく、自らのこれまでの人生そのものであったわけです。そのつかみ方がみごとだと思うのです。反対からいえば、一片の理論なんぞで救われるような生ではなかったということなのでしょう。つまり孤独に、金子は自分という一人の人間の思想のありかを凝視しています。知識に流されていません。『裁判記録』に残されている金子の供述は、常に「自分の言葉」で語られています。「不逞鮮人」の言葉を借りて自らの反天皇制を語っているのでもありません。彼女が発言する場合、必ず内発的な動機とともになされるのです。「自分の言葉」で語るからこそ、それはいつも行動とともに存在しています<sup>2)</sup>。

金子文子が自分を生き、自分の言葉で語ったことは、おそらく誰も否定しないが、その言葉や文体を文学研究の視点で論じたものは意外に少ない<sup>3)</sup>。それは金子文子の残したテキストが文学テキストとみなされなかったからであり、彼女の手記や手紙を通して、彼女の思想や行動について読み解くことが、アナキズムや天皇制や教育学や女性史などの視点から進められてきたからである。

2013年に発表された今後の金子文子研究の展望のうち、最後の部分に注目したい。

- 
- 2) 李順愛「金子文子 日本人女性と天皇制」、『二世の起源と「戦後思想」 在日・女性・民族』平凡社、2000年、35-36。
  - 3) 内藤千珠子「革命とジェンダー—金子文子が生きる共鳴のフレーム—」、『大妻国文』第51号、大妻女子大学国文学会、2020年3月は、文学研究者による優れたジェンダー論である。

朴烈と文子については、本格的な研究はこれからである。既に伝記もあるが、さらに多様な立場からのアプローチが揃って、初めて研究に幅も深みも出てこよう。大逆事件の真実のさらなる解明も必要であるが、同時にそれにのみ引きずられないで、二人の全体像を解明することが大切である。幸い日韓で共同研究の条件も整備されつつある。そのような視点で、彼女の足跡が再点検され、あわせて優れた自伝文学 といってよい獄中記、文子の遺した多くの短歌、そしてそれらに込められた彼女の生き方・思想にも改めて光を当て直してよいように思う<sup>4)</sup>。

（下線は引用者による）

作家の中野孝次は1976年9月発行の『早稲田文学』の特集「ブンガクだけが文学ではない」の、「現在の純文学に欠けたものは何か」という問いかけに対して、金子文子の文章と思想を語ることによって、間接的に純文学に欠けているものを示唆しようとしている<sup>5)</sup>。それから四十年以上経過した現在、純文学、特に小説偏重の近代的な文学観は、改められつつある。

小説ではなくても、文学テキストについて議論するには、精読が必要である。本論文は、先行研究や先人のコメントに敬意を払いつつ、金子文子の手記という文学テキストを精読するうえで必要なことを確認し、精読と分析の例を示し、文学テキストを読み込むことが、それが提示する重層的な問題を考える上で重要なことと、今後の研究の可能性について論じるものである。

まず初めに、金子文子とは何者かを考える。次に、金子文子の手記『何がわたしをこうさせたか』<sup>6)</sup>についてテキストの整備という点で考える。

---

4) 小松隆二「韓国に金子文子の足跡を尋ねる：門慶の朴烈義士記念館開館式に臨んで」、『春秋』(547)、2013年、12。

5) 中野孝次「憤り耐えたる—金子ふみ子の自伝のことなど」、『早稲田文学』(第8次)早稲田文学編集室編、早稲田文学会、早稲田大学出版部、通号4、1976年9月、29。

それから、従来、予審判事に促されて執筆したと考えられている自伝の構想の時期について再検討する。そして、手記のうち3つの場面の精読と分析を行うことによって、金子文子のテキストを社会的歴史的文化的コンテキストの中で再読する。

## 1 金子文子とは何者か？

金子文子とは何者か。韓国映画『金子文子と朴烈』（原題『박열 (朴烈)』2017年)が、日本で予想以上の観客を動員したとはいえ、金子文子は今もあまり知られていない。『日本大百科全書』には、「社会運動家」とある<sup>7)</sup>。『世界大百科事典』には、「朴烈事件で大逆罪に問われた女性」とある<sup>8)</sup>。『日本人名大辞典』には、「大正時代の無政府主義者」とある<sup>9)</sup>。日本でも韓国でも金子文子研究が進むにつれて、大逆罪で朝鮮人の朴烈とともに死刑判決を受けた日本人の妻というような二次的な扱いは減って、一人のユニークな人物として扱われるようになってきたが、事典レベルではこの人物が何者かであるかの判断は今も分かれている。

金子文子は社会活動家あるいは社会運動家かと言えば、雑誌『黒濤』、『太い鮮人』、『現社会』を朴烈とともに次々に出版したことは社会活動、社会運動である。論文に「社会運動家」と明記しているものもある<sup>10)</sup>。「この若い娘は運動家ではなく、哲学者だったのだ。」という意見もある<sup>11)</sup>。

---

6) 金子文子『何が私をこうさせたか』岩波文庫、2017年。以下、本書よりの引用はページを括弧書きで示す。

7) 『日本大百科全書』小学館、1994年。

8) 『世界大百科事典』改訂新版、平凡社、2007年。

9) 『日本人名大辞典』講談社、2001年。

10) 吉田千草「8.15特集ドキュメンタリー「朝鮮独立の隠れた主役 日本人独立闘士たち」制作協力報告—布施辰治と金子文子」、『図書の譜：明治大学図書館紀要』16：112 2012年。

11) ブレイディみかこ『女たちのテロル』岩波書店、2019年、132。

金子文子は思想家かと言えば、思想書は書き残していない。しかし、獄中手記『何がわたしをこうさせたか』は思想形成の跡をたどったものとも言える。山田昭次は、金子文子の政治的無防備を指摘して、「文子には思想的な素質は豊かだが、政治運動家としての素質は朴と比較するとずっと乏しいように思われる。」と述べている<sup>12)</sup>。

金子文子は作家かと言えば、死後出版の著書が一冊、歌集が一冊存在するゆえに、作家と呼ぶことも可能ではある。「金子文子は監獄、法廷で表現を残し著作、歌集として刊行されたものもある。同志たちは金子文子の表現、裁判をアナキズム運動誌紙で伝え、同時に国境を越えた東アジアでのアナキズム運動の動向を掲載した。」<sup>13)</sup>のである。

映画『金子文子と朴烈』の映画監督イ・ジュニクは金子文子を「国家も民族も超える完全なアナキスト」と呼び、ヴァージニア・ウルフやローザ・ルクセンブルクに匹敵するような東アジアのフェミニストと呼んでいる。金子文子の役を演じるために手記も裁判記録も読み込んだ女優のチェ・ヒソは、金子文子は「すごいアナキスト」であり、「フェミニストとして重要で貴重な人物」である<sup>14)</sup>と語っている。

裁判所における金子文子本人の自己規定を見ると、第一回被告人尋問調書（1923年10月25日 東京地方裁判所）では、族称は平民、職業は人參行商と答えたと記録されている<sup>15)</sup>。第一回訊問調書（1925年7月18日 市谷刑務所）では、族称は「神聖な平民です」と答え、職業は「現にあるものをぶち壊すのが私の職業です」と答えたと記録されている<sup>16)</sup>。重要なことは、訊問

12) 山田昭次『金子文子 自己・天皇制国家・朝鮮人』影書房、1996年、175。

13) 亀田博「三・一独立運動と金子文子の叛逆的気分（三・一独立運動、五・四運動百年：二〇一九年秋季韓国大会報告）」、『社会文学』（52）、2020年、39。

14) インタビュー「百年前のアナキストからの「贈物」、映画『金子文子と朴烈』日本公開に寄せて」、『世界』（919）2019年4月号、237-244。

15) 鈴木裕子編『金子文子 わたしはわたし自身を生きる 手記・調書・歌・年譜』増補新版、梨の木舎、2013年、293。この人參とは朝鮮人參である。

16) 同 334。

をした側の理解と期待は、無政府主義者、アナキストとは、暴力的な破壊活動をして秩序を乱す危険な存在であるということである。現代の私たちが金子文子はアナキストだというときには、アナキズムについて一般に流布しているテロリストや破壊者というイメージではなく、人間平等を希求する反権力の思想運動であり、現在も継続中で環境問題やフェミニズム運動にも共通する思想運動として理解することが必要になる<sup>17)</sup>。

アナキズムがあらゆる権威を否定する運動であることと、家父長制社会における女性の思想と行動の評価の困難を理解しているのであれば、金子文子を他の権威と結びつけるような紹介の仕方こそ回避すべきものであって、肩書や職名で呼ばずに、金子文子の思想と行動について考えるという姿勢こそ、もっとも望ましいものなのかもしれない。

同様のことが、金子文子の手記『何がわたしをこうさせたか』についても言える。この手記は、獄中手記であり、告白であり、半生記であり、自伝であり、伝記的小説や近代小説や社会評論や教育論の要素も持っている。本論ではこの著作について原則として「手記」と呼ぶことにするが、文脈によっては別の呼び方もすることにする。

## 2 金子文子のテキストの整備の問題

テキストの精読の前には、テキストが精読できるものになっているかという問題がある。獄中記が「宅下げ」されて編集を経て出版された『何がわたしをこうさせたか』について考えるとき、どこまでが金子文子本人が書いた原稿どおりなのか検討しておかなければならない。一つには検閲の問題があり、もう一つには出版を託された同志による編集の問題がある。また、手紙には異本、別バージョンがある。

---

17) Colin Ward, *Anarchism: A Very Short Introduction*, Oxford UP, 2004. 参照。

（1）検閲の問題

金子文子自身が「皮手錠はた暗室に飯の虫只の一つも嘘は書かぬど」「在ることを只在るがままに書きぬるをグズグズぬかす獄の役人」「言わぬのがそんなにお気に召さぬならなぜに事実を消し去らざるや」と短歌に詠んでいるように<sup>18)</sup>、彼女は獄中でまとまった文章を自由に書く困難を十分に自覚していた。

亀田博は、「未決囚の期間、獄中者が手紙を書く以外にまとまった文を書くには獄中処遇の範疇で所長の「許可」が必要であったと推測される。仮に「逸脱」して書いた場合、獄外に出すには「検閲」が存在し黒塗りで読めなくなる。」と述べている<sup>19)</sup>。このことは金子文子も十分に承知していたはずで、「手記の後に」には、「私の手記はこれで終る。これから後の事は、朴と私との同棲生活の記録のほかはここに書き記す自由を持たない。」(408)という言葉がある。この手記は「検閲」が入るのを怖れて、「自己検閲」をした文章なのである。しかし、それは手記の目的を果たすことを断念するような「自己検閲」ではなかった。

金子文子の場合は幸いなことに、当時は公にされないという前提で記録された金子文子の大審院での発言、予審尋問調書における予審判事との応答が、そのまま半世紀余りに後に公開された<sup>20)</sup>。もっとも、調書は、「密室での聞き取りであり、前後の文脈に誘導的なものがあり、「意図しない断片的言辞が、縫い合わされている恐れが、多分にある」し、裁判判決文は、「はじめから予見に基づいた結論であり、犯罪者にしたてるための強引な理屈付けに終始している」<sup>21)</sup>ということを念頭に置きながら、注意深く読む必要がある。

---

18) 鈴木編, 384。

19) 亀田39。

20) 亀田39。

21) 飯島勤「自学の系譜 [II] 私自身を生きる！—教育論としての金子文子自伝—」, 「社会臨床雑誌」20(2), 2012年, 85。

## （2）栗原一男の編集の問題

宅下げされた手記の原稿を受け取り、出版を託されたのは、同志の栗原一男である。栗原は1923年7月に朴烈と金子文子の家に寄宿するようになり、二人の検束後、栗原も10月にとらえられるが翌年秋には釈放されて、二人への差し入れや文通、外界との接触の橋渡しをつとめた<sup>22)</sup>。山田昭次作成の「不逞社員一覧表」によれば、栗原は21歳で、20歳の金子文子とほぼ年齢が変わらない<sup>23)</sup>。金子文子の死後、手記と歌集を編集し、出版のために私費を投じるなどして、彼女の仕事を後世に伝えた最大の貢献者である<sup>24)</sup>。

栗原一男は出版までに元の原稿にどこまで手を加えたのであろうか。金子文子が栗原に宛てた「添削されるについての私の希望」は、手記の冒頭に公開されている。

### 添削されるについての私の希望

金子ふみ

栗原兄

- 一、記録外の場面においては、かなり技巧が用いてある。前後との関係などで。しかし、記録の方は皆事実に立っている。そして事実である処に生命を求めたい。だから、どこまでも『事実の記録』として見、扱って欲しい。
- 一、文体については、あくまでも単純に、率直に、そして、しゃちこ張らせぬようなるべく砕いて欲しい。
- 一、ある特殊な場合を除く外は、余り美しい詩的な文句を用いたり、

---

22) 瀬戸内寂聴『余白の春 金子文子』岩波現代文庫、2019年、81。

23) 山田 116-7。

24) 金子文子の獄中手記を出版する際、栗原一男は十万円を出版費用として共学文庫の大島英三郎に寄贈した。『赤いつつじの花—金子文子の思い出と歌集』黒色戦線社、1984年、64。



あくどい技巧を弄したり廻り遠い形容詞を冠せたりすることを、出来るだけ避けて欲しい。

- 一、文体の方に重きを置いて、文法などには余りこだわらぬようにして欲しい。(11)

栗原が手記の出版の際に、これを自分の序文「忘れ得ぬ面影」と金子文子自身の「手記の始めに」の間に掲げたということは、彼が彼女との約束を守ったことを読者の前に示していると見てよいであろう。栗原は、瀬戸内寂聴（当時は瀬戸内晴美）の取材に対して、次のような証言を残している。簾という比喩が卓抜で、一度読んだら忘れられないものである。

「……文子の頭のいいのは天才的だった。あの手記は、実のところ、私の手に渡ったのはずいぶん後で、立松にやいやいいって、やっととりかえた。ところが、その時の原稿は方々に鋏をいれて切り取ってあって、一枚の原稿用紙が、まるで簾のようなんだな。それは他人じゃ、とても読めない。まあ、私は日頃、文子からいろいろ話を聞かされているので、切り取ったところがどういうものか判じることが出来る。そこで、私と加藤一夫で加筆添削して、あの本の形にした。題も文子がつけていたものではなくて、われわれが相談してつけたものだ」<sup>25)</sup>  
(下線は引用者による)

「加筆添削」という言葉から通常受け取れる意味とは大きく異なる作業が行われたことがわかる。「検閲」によって削除された語や文を、金子文子との会話の記憶や手紙の発言などを手掛かりに読解可能なものに回復するという編集作業だったのである。もっとも、この手記の題名は栗原と加藤の発明ではなくて、金子文子自身が「手記の後に」に書いた「何が私を

---

25) 瀬戸内 85。

こうさせたか。私自身何もこれについては語らないであろう。私はただ、私の半生の歴史をここにひろげればよかったのだ。心ある読者は、この記録によって充分これを知ってくれるであろう。私はそれを信じる。」(48)から引用されている。何がこうさせたかについては語らないと断言しながら、この半生記は読者に何が彼女にそうさせたかを力強く語りかけており、彼女もそのことを確信していたのである。これ以外の題名はありえない題名が選ばれたということになる。

瀬戸内寂聴も次のように述べている。

この希望〔添削されるについての私の希望〕を見ても、文子が文学的にも二十をこえたばかりの若さとは思えない老成した文学観を持っていたことが察せられる。リアリズムで、ドキュメント文学の神髄を目指していた意図がはっきりとかがえるのである。もちろん、文章の抹消についての添削や整理はあっただろうけれど、「何が私をかうさせたか」と題された手記を読むと、文子にしか書くことの出来ない文子の運命や、心の陰影がはっきりと正確に、描破されているのを見る<sup>26)</sup>。(下線は引用者による)

### (3) 手紙の異本と自伝の構想の時期

歴史学者にとっては、資料に異本がある場合、どれが最も信憑性があるのかを考えるのが第一に来て、信憑性に疑問が少しでもある場合は、資料的価値を失うのであろう。文学研究者にとっても、定本を作る作業においては、それは同じだが、異本の表現の振幅は、文学テキストの発生と受容の間に生成するテキストの豊かさを示してくれることにも、文学研究者や文学表現者は関心を持たずにはいられない。そこには、金子文子を現代の私たちがどのように受容できるのか、受容していくべきなのかという問題

---

26) 瀬戸内 86。

のヒントも眠っている。このように手紙にせよ手記にせよ、多少の改変はされたものの、金子文子の肉声が今も聞こえるという仕組みはどのようにして可能になったのであろうか。手紙の具体的な異本について、自伝の構想の時期と合わせて検討する。

① 恩師宛ての手紙の2つのバージョン

これまでの研究者は手記の読解から金子文子の思想を読み取ることに注力していたためか、自伝というテキストの発生の過程に注目した者はいないように思われる。岩波文庫の巻末にある「年譜」では自伝の執筆は1925年の夏か秋とされている（433）。どの研究者も作家も、彼女が手記を書いたきっかけは、「手記の初めに」で書かれたように予審判事に過去の経歴について書けと命じられたからだと信じているようである。しかしながら、金子文子は手紙の中で別の事を語っている。それは恩師宛ての、原本が失われているが、二つの異本、二つのバージョンがある手紙である。

問題の手紙は、朝鮮の美江尋常高等小学校時代の恩師、服部富枝宛ての手紙である。手紙Aは、1935年2月『朝鮮公論』263号に庄司文雄「世の母たる人へ 二人の反逆児を育て（ママ）む忠北の一寒村—金子文子と佐郷屋留雄の朝鮮時代—（其の二）」という記事で紹介されたものであり、手紙Bは1926年7月31日付け『東京朝日新聞』に「金子文子が死の前に恩師に送った手紙 虐げられた一生をこまごまと 世をのろひ人をにくんだ涙ながらの告白」と題した記事で紹介されたものである<sup>27)</sup>。内容はほぼ同じだが、文体や表現に差異がある。この手紙は複数の根拠から1923年6月から7月頃に書かれたと推定されている。したがって、この手紙は死の直前に獄中で書かれたという手紙Bの新聞のリード文は偽りである。

手紙Bのほうが手紙Aよりも短く、省略が多いが、Aも全文ではなく抜

27) 山田 293。『朝鮮公論』23(2)(263)、2月号、朝鮮公論社、1935年2月、106-13。明治大正昭和新聞研究会編『新聞集成大正編年史』大正15年度版 中巻、大正昭和新聞研究会、1966-1988、791-92。

粹であると山田は考えている<sup>28)</sup>。読んだ印象としては、Aは手記などから感じ取れる金子文子の肉声が聞き取れるように思われ、BはAに基づいて所々書き換えたりして圧縮したものであるように思われる。しかし、実際には、発表年代はBのほうがAよりも前である。Bの発表は、金子文子の遺体が火葬された日である<sup>29)</sup>。Aの発表年代は、手記が春秋社より初めて出版された1831年の4年後にあたる。Aがこの時期に発表されたことによるような意味があるのかは不明である。どちらの記事も金子文子の死後であり、悲惨な境遇により世を呪い人を憎んで大逆罪を犯したという枠組みの中で成立している。

手紙の受取人である服部富枝は、師範学校を出たばかりの新任の教師で、校庭に誘導円木や廻転塔などの運動器械を設置し、農業の実習などの教育実践を行った。服部がいつも文子に優しくなかったわけではなかったが、手記には服部の新しい教育が子どもたちを喜ばせたと書かれていることから、この教師が文子の生涯の数少ない喜びの記憶と結びついていることがわかる。Aの手紙の冒頭に「只今はいつも乍らの温かい御葉書ありがたう存じました」とあり、この恩師と一度ならず文通があったことがうかがわれる。金子文子は葉書を読んで声をあげて泣いたことを述べ、「只先生のみにはかく理解して下さいと、此の地球の上に私の過去の幾分をでも正当に理解批判して下さいの方があれば、私はそれで結構です。」と、信頼と敬意を感じていたことがわかる。この2つの手紙に自叙伝を書くことについて述べている箇所があることに、これまでの研究者たちはあまり注目してこなかったようだ。手紙Aと手紙Bの異なる文章表現を比較して、文子と自伝の構想の時期について考えてみたい。

## ② 婦人雑誌への掲載という予定

---

28) 山田 295。

29) 鈴木編 2013, ⑤。

【A】 或小説家の取計ひで只今自分の自伝を書いて居ります。九月か十月にさる婦人雑誌に掲載出来る筈ですから、さうしたら是非御読みになって下さいまし。それは朝鮮時代のことを重おもに書いて、在鮮人の紹介と、私当時のことについて明らさまにさらけ出して、世の多く母方の育児資料にしたいと思ひます。延いては虐げられた人間がどう変わるものであるか、及ばずながら記したく思ひます<sup>30)</sup>。(山田 295) (下線は引用者による)

【B】 これまで何度も何度も先生に対し手紙を書きましたが、みな私の愚痴でしたから書いては破り、破っては書き遂に今日になりました。あの当時の私、延いてはあゝした生活が囚をなした今日の私の生活と思想——それはたれにも語りません。それは先生のみには語り解して下さると、この地球上に私の過去の生活の幾分でも、正当に理解、批判して下さいの方があればそれで結構です。私は今愛の精に対する気持ちでこれを書いてゐます。私はある時、虐げられた人間がどう変化するか、自叙伝を書きたいと思った事が一再ならずありました<sup>31)</sup>。(下線は引用者による)

手紙Aでは、ある小説家の取り計らいで、自伝を執筆したら九月か十月に婦人雑誌に掲載できる運びであると述べている。この小説家とは、取り調べの際に、朴烈と金子文子に好意を持って生活費の補助をしてくれた人物として名指しされている有島武郎（1878-1923）（第四回訪問調書 1925年9月11日東京地方裁判所）<sup>32)</sup>であろうか？ 有島武郎は、金子文子が検束されたときにはすでにこの世の人ではなかったが、金子文子が獄中で作った短歌に「ホイットマンの詩集ひら披けばクロバアの押葉出でたり葉数かぞふる」

30) 山田 295。

31) 山田 299-300。

32) 鈴木編 338。

というものがあり<sup>33)</sup>、有島武郎訳の『ホキットマン詩集』の第一輯が叢文閣より1921年に、第二輯が1923年に出版されていることを考えると、有島武郎との応答は彼女の青年期を通して続いたのではないかと思われる。

興味深いことに、栗原一男は瀬戸内寂聴の取材に対して、有島武郎の他に、朴烈と金子文子は神近市子 (1888-1981) からもたびたび金をもらっていたが、金子文子と神近市子がどこで知り合ったかは知らないと言言している<sup>34)</sup>。神近市子は1916年葉山日蔭茶屋事件で恋人の大杉榮を刺傷したことにより2年間の懲役を務め、1919年10月に出獄後、文筆生活に入り、鈴木厚と結婚した。1922年には金子文子と朴烈も、神近市子も世田谷区池尻に住んでいた<sup>35)</sup>。神近市子は『婦人公論』1923年5月号に「獄中通信」を寄せている<sup>36)</sup>。出自も教育歴も対照的な二人がいつどのような形で出会う可能性があったのかは、今後の研究を待ちたい。

### ③ 『婦人公論』と有島武郎

自伝を掲載する予定である「さる婦人雑誌」とはどの雑誌であろうか？ 20世紀初めには、1905年に『婦人画報』、1916年に『婦人公論』、1917年に『主婦之友』（のちに『主婦の友』）、1920年に『婦人倶楽部』が相次いで創刊された。このうち『婦人公論』は他の女性雑誌が実用記事を主とし、良妻賢母を掲げたのに対して、女性解放、男女同権をめざす、インテリ向け女性評論誌として出発し、総合雑誌的であった。平塚らいてうと与謝野晶子の「母性保護論争」や、芳川鎌子事件・柳原白蓮事件などの恋愛事件を特集したことで有名である<sup>37)</sup>。

---

33) 鈴木編 366。

34) 瀬戸内 79。

35) 『神近市子自伝 わが愛わが闘い』神近市子著作集第6巻、学術出版会、2008年、249。鈴木編②。

36) 『婦人公論』（復刻）、与那覇恵子、平野晶子監修、第2巻、戦前期四大婦人雑誌目次集成(1)、ゆまに書房、2002年、5。

当時の婦人雑誌の目次を見てみると、プロの作家の体験記や創作や評論と、読者の「懸賞」企画などによる投稿から成るという特徴がある。著名な作家たちの寄稿という点では他誌を圧倒する『婦人公論』の1923年5月号、「懺悔物語」号<sup>37)</sup>を例に見てみよう。「公論」として「文學上告白の意義」や「近代文学に現れたる懺悔告白」を論じたもの、「世界三大懺悔録評論」としてアウグスティヌスとルソーとトルストイを各々取り上げた評論三本、「島崎藤村氏の懺悔として観た「新生」合評」の記事がある。その後には神近市子の「獄中通信」など作家による作品と、「半生を顧みて」という題で懸賞募集した読者の当選作品が掲載されている。金子文子の場合、懸賞への応募という段階を飛び越えて、著名作家の仲介によって新人作家としてデビューするというケースであろう。読者は「懸賞」の散文や詩歌で体験記や境涯詠を期待されるのに対して、プロの作家は体験記や、体験や観察と考察に基づく評論、技巧を凝らした芸術作品を書くことが期待されていた。金子文子はまずは体験記である自伝を発表して評価を得てから、次のステップ、社会評論や小説に進もうとしたのではないかと思われる。

『婦人公論』は金子文子との関わりが深い。1926年4月発行の5月号には、金子文子の「獄中雑詠」と「金子文子に會ひに上京した母親」（阪田徳太郎）が掲載されている<sup>38)</sup>。このとき金子文子はまだ生きて宇都宮刑務所栃木支所にいる。彼女の死の翌年1927年の2月発行の3月号には、「『問題の怪写真』を見た刹那の感想」と題して、朴烈の膝に抱かれて本を読む金子文子の写真に対する、24名の著名女性たちの感想が掲載されている<sup>40)</sup>。「怪写真」配布の背後にある政争については1926年11月号に奥むめお等5名が意見を述べ、「今月の問題」で吉野作造が「朴烈問題に関する責任の所在」とし

37) 『日本大百科全書』、『世界大百科事典』。

38) 『婦人公論』（復刻）、第2巻、4-5。

39) 同、第3巻、205。

40) 同、第3巻、278。

て取り上げている<sup>41)</sup>。

金子文子を婦人雑誌に紹介した小説家の最有力候補である有島武郎は、1923年の『婦人公論』4月号に、「私が女に生れたら？ 何う男を遇するか?!」という小特集に、鶴見祐輔らとともに寄稿しており、6月号の「芸術家と女性との交渉問題」にも寄稿している<sup>42)</sup>。有島武郎の心中自殺は6月9日で、遺体の発見は7月7日である。山田昭次は複数の証拠から、金子文子の恩師にあてた手紙は1923年3月から9月2日の間に書かれたものと推定した上で、文中の梅雨という表現から、6月か7月頃のものとして結論している<sup>43)</sup>。しかし、金子文子が存命中の有島武郎の紹介によって雑誌掲載が決定してまもなく恩師に手紙を書いたのであれば、この時期は5月の梅雨の走りの頃に早まる可能性がある。

そもそも金子文子の自伝が完成して原稿が出版社に渡されたのかという問題もある。そして9月1日の関東大震災とデマと内務省などの扇動による朝鮮人虐殺が金子文子の運命を大きく変えた。ある小説家が有島武郎であったのか、有島武郎の急逝と関東大震災によって掲載予定の原稿が掲載されなかったのかどうかはわからない。金子文子の自伝が婦人雑誌に掲載されることはなかったという事実のみが残った。

#### ④ 自伝の構想の時期

自叙伝が女性雑誌に掲載される予定という記述は、自伝の構想の時期について別の重要な問題も示唆してくれる。研究者たちは、収監中に立松予審判事にすすめられて自分の生い立ちの記を執筆したという「手記の初めに」の叙述をつねに引用し、これを信頼して議論を進めているが、恩師宛ての手紙のこの部分が引用者の完全な捏造でない限り、金子文子は検束される前に、自伝の執筆をすでに考えていたということになる。手紙Aには

---

41) 同、第3巻、246-47。

42) 同、第2巻、267、280。

43) 山田 260-261。



具体的な執筆と発表媒体まで書かれてある一方、手紙Bには「自叙伝を書きたいと思ったことが一再ならずありました」とある。手紙Bの記述からうかがわれることは、自叙伝を書くことで有名になろう、作家になろうという野心があったかもしれないことである。「一再ならずありました」ということから、それは短く辛い人生の中で何度も思い浮かべられたことがうかがわれる。そのように考えてみると、自叙伝を書くのだという思いが、七年間の朝鮮での虐待生活やその後上京するまでと上京後の金子文子の人生の支えになっていて、原稿用紙に向かうようなことはなくとも、半生のナラティブは繰り返し頭の中で練り上げられたのではないか。そして、いよいよ獄中で予審判事に命じられて手記の執筆に向かったときには、それがほぼ完成した形でスラスラと出て来たのではないか。それこそ、現在も読む者を驚かせる金子文子の、今も生きている言葉と文体の秘密なのであろう。

以上のような考察は、「自伝は予想される死刑を目前にして肉体を摩滅させるほどの労苦を重ね、書物を読んで思索を深めつつ書いたものであった。」<sup>44)</sup>という山田昭次の『裁判記録』に基づく考察と対立するものではない。

獄中で判決が出された後、1926年3月29日には、金子文子は「生立の記が完成したので伊藤野枝全集を読み耽っている」と報じられている<sup>45)</sup>。伊藤野枝が関東大震災のときに大杉榮とともに虐殺された折には、『婦人公論』は大きな特集を組んでいるが、世論は危険人物とみなしており、この報道から金子文子が伊藤野枝に並んで国民の敵とされたことがわかる。伊藤野枝を始めとした獄中における読書と思索が金子文子の文体にどのような影響を与えたかは、さらに議論を行う必要がある。

---

44) 山田 192-194。

45) 鈴木裕子・亀田博作製「年譜」, 鈴木編, ④)。

### 3 文学テキストとしての精読と分析

手記『何がわたしをこうさせたか』の「添削されるについての私の希望」の第一項には、「記録外の場面に於ては、かなり技巧を用いてある」という記述があり、作家としての意識が認められる。そこで手記の中の3つの場面を精読し、分析することで、金子文子のテキストを、作家を社会的歴史的文化的コンテクストの中に置いて理解したい。ここでは母が新たに連れ添った小林という男とともに金子文子が移住した、小林の生まれ故郷、山梨県の小袖部落の描写と、朝鮮の美江村を台山の上から見た場面と、虐待に堪えかねて自殺しようとした場面を精読し、分析することにする。

#### (1) 小袖部落とビタミンと貨幣経済

小袖部落は、山間にあり、稲田を作るほどの広さはなく、主たる産業としては炭焼き(木炭作り)、養蚕、山葵作りぐらいしかできないことをまず描写した後で、金子文子は次のように付け加える。

しかし、こんな粗食で健康が保たれるはずはないなどと思っ  
けない。なぜなら、一度山にわけ入ってみるがいい。そこには近頃流行のいわゆるビタミンを多量に含んだ、そして常食で欠乏している糖分やカロリーのとくさんなあげびだの梨だの栗だのが、素晴らしく豊かにみのっているからである。私達子供はもちろん、大人でさえもこれを採って食べる。それでもなお余ったのが鳥や鼠の餌となるのだが、中にはそれらの動物の目にも触れないで、撓わんだ枝のまま地に埋って腐っているのもあった。それだから、子供達が追いまわすほかに、誰も殺しはしなかったが、もし狩猟さえすれば多分に食料となるべき野生の動物が、殊に兎が、村のすぐ後ろの山や、学校往復の途中の林などにはしょっちゅう跳ねまわっていた。

私が本当に自然に親しんだのはこの頃である。おかげで私は村の生活がどんなに理想的で、どんなに健康で、どんなに自然であるかという  
ことを今日も感じている。それにしても村の人の生活をこんなにみ  
じめにするものは何であろう。(72-73)（下線は引用者による）

「近頃流行のいわゆるビタミン」の「ビタミン」は、大正時代から昭和にかけて世界の科学者によって次々に発見され、病気との関連がわかってきた。当時の日本の国民病は結核と脚気で、結核を根本的に治療できる抗生物質はまだ発見されず、脚気は白米の常食が広まるにつれて深刻さを増し、最大で1923（大正12）年には26796名の死亡者を記録している<sup>46)</sup>。このような状況下で富裕層の栄養に対する関心は高く、大正時代は栄養という言葉が一般化した<sup>47)</sup>。鈴木梅太郎が明治44年に三共合資会社で開発した薬剤オリザニン<sup>48)</sup>は、大正8年以降臨床で用いられるようになった<sup>48)</sup>が、市販されたのは大正15年からであり、ビタミンB<sub>1</sub>の錠剤やビタミン注射剤の登場は戦後になってからである。

『日本国語大辞典』に「ビタミン」の初出を求めると、風俗の中のビタミンがわかる。石坂洋次郎の小説『海を見に行く』（1925年）に「ビタミンが不足してるから支那蕎麦がいいと言うので」という記述がある。また、寺田寅彦の『ルクレチウスと科学』（1929年）の緒言には、「ビタミンを欠いた栄養は壞血病を起し脚気症を誘発する」という記述がある<sup>49)</sup>。蕎麦は胚芽が中心部にあるため精製せずに挽いて作られるので、小麦や米よりもビタミンB<sub>1</sub>やB<sub>2</sub>を多く含んでいる。したがって小麦粉から作られるうどんも中華そばもビタミンという点では蕎麦ほど優れた食品ではないのだ

---

46) 日本ビタミン学会編、『ビタミン学Ⅱ』東京化学同人、1980年、3。

47) 中原順子「第9章 都市家庭の栄養と食事」、湯沢雍彦編『大正期の家庭生活』クレス出版、2008年、119。

48) 山下政三『脚気の歴史 ビタミンの発見』思文閣、1995年、309-311、433。

49) 『日本国語大辞典』第2版、2002年。

が、この記述から当時の富裕層の認識は、ビタミンは身体にいいという程度のものであったことがうかがわれる。脚気はビタミンB<sub>1</sub>の不足で、壊血病の原因はビタミンCの不足だが、随筆家である科学者寺田虎彦の記述も、ビタミンB<sub>1</sub>とビタミンCの区別はなく、何よりもまずビタミンという言葉の普及と、栄養と健康の関係に対する注意喚起を図ろうとしたこともわかる。

こうしてみると、金子文子も十全な栄養学の知識を持っていたわけではなからうが、ビタミンのみならず糖質(糖分)やカロリー、蛋白源という、山村の住民の健康福祉にまで考察が及んでいることは、注目すべきである。

引用した場面の直後に、金子文子は、村人がたまたに部落を訪れる行商人の誘惑に負けて、繭と炭、山葵を安く売って、見た目の良い都会の商品と交換してしまう様子を描写している。物物交換という形を取っていても、この村人たちは貨幣経済システムに組み込まれている。そのような現状に対して、金子文子は、貧しい山村が実は豊かな資源を持っていることを示し、その豊かな資源が搾取の構造によって土地の人々の豊かさにつながらない構造を見抜いている。また、「泊賃は町の商人宿の四分の一、五分の一ぐらいですむ。ことによると旅人として歓待されて宿賃などは取りもしない。」(74)という記述から、この山村には外部から来た旅人をもてなす文化があったことが示唆されている。この前近代的な、人間を大切にする文化が近代資本主義社会では、搾取者に利用されていることにも気づいているのである。注目すべきは、商人が悪辣であるとか、商品の誘惑に負ける母たちや娘たちを愚か者であるというような個人に向けた批判を全く加えていないことである。社会変革には個人の「道徳」ではなく、社会構造の変革が必要だという視点がある。

「私が本当に自然に親しんだのはこの頃である。おかげで私は村の生活がどんなに理想的で、どんなに健康で、どんなに自然であるかということを感じている。」という記述には、自然に親しむのが人間の自然であるという、「自然」という言葉の二つの意味が現れている。ビタミンの

知識がなくても自然に親しむことで自然にビタミンを始めとした栄養が摂取できるように、人間本来の生活の豊かな可能性がここにはあるのに、都会が田舎から奪取するという搾取の構造の中で、田舎は病み衰えていく。手記には、このほかにも海辺の自然の場面もあり、自然の中で深呼吸し、自由を実感することで金子文子はたびたび元気を取り戻している。ここに、悲惨極まりない金子文子の半生記の爽やかな印象<sup>50)</sup>の源泉がある。

この場面が続いて、「わたしの考えでは、村で養蚕ができるなら、百姓はその糸をつむいで仕事着にも絹物の着物を着てゆけばいい。なにも町の商人から木綿の田舎縞の帯を買う必要はない。繭や炭を都会に売るからこそ、それよりもはるかにわるい木綿やカンザシを買わせられて、その交換上のアヤで田舎の金を都会にとられて行くのだ。」(73) という考察と提案がある。絹織物を普段着に着るという逆転の発想がある。社会学的な分析であり、今なら地方再生のビジネスモデルを作れそうな観察力である。この部分について、鶴見俊輔はクロボトキンなどの影響による農村の自給自足の強化による活力の創出と指摘している<sup>51)</sup>。

この小袖部落の描写と対照的であるのは、父方の祖母に引き取られて行った、朝鮮の美江村の日本人の部落の描写である。

それではこのわずかな日人部落内の状態はどうであったかという  
と、これはもともと利益を求めて集まって来た連中であるから、ほん  
とくに共同的な精神でつながっていようはずはなく、村を支配する精  
神も力もすべては皆、金であった。で、金のあるものは自然と勢力が  
あって、村の行政—という少し大げさのようであるが—についても、

---

50) 徐京植 解説「颯爽と独立する精神—反権力と反差別を貫いた女性の鮮やかな生涯」、金子文子『何がわたしをこうさせたか』増補新装版、春秋社、2005年、346。

51) 鶴見俊輔「金子ふみ子—無籍者として生きる」、黒川創編『思想をつむぐ人たち』、鶴見俊輔コレクション1、河出文庫、2012年、85。

そういった連中がはばをきかせていた。すなわち、金があって、ぶらぶら遊んでいて、流行おくれの都会風の着物を着ているような、そんな階級人が威張っているのがあった。(98)

部落の構成員に対して、かなり手厳しい批判が加えられている。彼らの実際は派手で、虚栄的で、汽車で名士や高官が駅を通り過ぎるたびに、「赤十字社員」章や「愛国婦人会」の徽章や「清州美江間道路開通記念」のメダルなどをさげて、歓迎する。提灯行列や仮装行列、芝居や狂言の真似も、暇つぶしにすぎず、しかもそれらは、日本人のうち裕福な階級の者の占有するイベントであって、日本人の貧困層はそれを茫然と眺めていた。金子は倫理的な視点で、社会の中の個人の虚栄と墮落に満ちた行いに厳しい批判を加えている。このような「新開の植民地にふさわしい風俗習慣」(100)と皮肉をもって語られるものを背景として、岩下家で金子文子に加えられる肉体的精神的虐待がこの後次々に描写されることになる。

## (2) 美江村の鳥瞰図と権力

次に取り上げるのは、朝鮮の岩下家で金子文子が、心安らぐ場所を求めて、栗拾いの手伝いを口実にして学校を休み、一人で山に登って、自然の中で心安らぎ、自由な空気を吸う場面である。叔母が所有する台山に登った彼女は、人の気配に驚いて草むらから飛び出した雉や兔に優しく声をかけながら、栗拾いに精を出す。そして袋が重くなると、鎌や棒切れや袋を放り出して、一直線に山のでっぺんにまで駆け上って行き、そこで休む。目の前に村の風景が広がる。

頂上には、木というほどの木がなく、黄色い花の女郎花や、紫の桔梗だの萩だのが咲き乱れている。先生が、「あれは山ではない、丘だ」と定義をしたことがあるくらいで、この山は決して高い山ではなかったが、それでも位置がいいので頂上に昇ると、美江が目の下に一目に

見える。

西北に当たっては畑や田を隔てて停車場やその他の建物が列なっている。町の形をなした村だ。中でも一番目につくのは憲兵隊の建築だ。カーキ服の憲兵が庭へ鮮人を引き出して、着物を引きはいで裸にしたお尻を鞭でひっぱたいている。ひとつ、ふた一つ、憲兵の痾高い声がきこえて来る。打たれる鮮人の泣き声もきこえるような気がする。

それは余りいい気持ちのものではない。私はそこで、くるりと後に向きかわって、南の方を見る。格好のいい芙蓉峰が遥か彼方に聳えている。その裾を繞<sup>めぐ</sup>って東から西へと、秋の太陽の光線を反射させて銀色に光る白川が、白絹<sup>ものう</sup>を晒したようにゆったりと流れている。その砂原を荷を負うた驢馬が懶そうに通っている。山裾には木の間をすかして鮮人部落の低い藁屋根が、ちらほらと見える。霞の中にぼかされた静かな村だ。南画に見るような景色である。

それをじっと眺めていると、初めて私は、自分がほんとに生れて生きているような気がする。ゆったりとした気分になって草の上にごろりと横たわって、空を眺める。深い深い空だ。私はその底を知りたいと思う。私は眼を閉じて考える。涼しい風が吹いて来る。草がざわざわと風に鳴る。再び眼を開けると、蜻蛉が鼻の先に富んでいる。耳もとで鈴虫や松虫が鳴っている。

学校はおひる休みになったのであろう。（後略） (155-56)

文子は晴れやかな気持ちになり、おーいと叫んでみたり、唱歌や即興の歌を歌い始めたりする。「常々の押し込められた感情が自由に奔放に腹の底から噴き上げて来る。そしてそれが私を慰める」(157)。喉が渴いて、梨畑で取った梨を皮ごと食べ、地面に寝そべって雲を見る。草いきれや茸のかおりを貪るように吸い込む。「ああ自然！ 自然には嘘いつわりがない。自然は率直で、自由で、人間のように人間を歪めない。心から私はこう感じた。「ありがとう」と山に感謝したくなる」(157)。

「私の解放された日」(157)の気持ちのいい鳥瞰図であるが、その中に朝鮮人に笞刑を加える日本人の憲兵の姿が書き込まれている。実際に聞こえるのは鞭打ちの回数を数える日本人の声だけであるが、金子文子の日頃の観察眼と耳は鞭打たれる朝鮮人の苦痛の声も聞き取っている。多くの論者が指摘するように、ここには「無籍者」であったゆえに獲得した外部の視点、日本による植民地支配を客観的に見る視点がある。

その上に不気味な点の一つあることを付け加えたい。この台山たいさんに普段来るのは栗の収穫を務めとする身体の弱い叔母の夫なのだが、この山の上から金子文子をいじめ抜いた祖母が、学校にいる金子文子を監視していたことがわかる記述がある。「……下司の貧乏人の子の真似ばかりしてさ。女の子なら女の子で、少しや高尚な女の子の真似でもして見るがいい。だから明日からはこれも厳禁だ。——ブランコや鬼ごっこもさ。学校ですることあわからんと思ってやっても駄目だぞ、わしゃうちの上の山に登ってちゃんと見張りしているからな……」(147) (下線は引用者による)。

このように監視者であり権力者である祖母と同じ俯瞰する視点を、文子は有していたのである。この場面を語る前に、文子は、「学校も家庭も、今の私にとっては一つの地獄にしかすぎなくなってしまった。」と回顧している。そのような状況の下でも活路を見出そうとして、叔父が具合が悪い時に、金子文子は自分から進んで祖母に頼んで家庭の手伝いのために学校を休ませてもらって、栗拾いという口実の下に一人の自由な時間を確保したのである。このようなことは、よほど頭の働く子どもでなくてはできない。子どもであった文子も、成長した語り手である文子も、それについて祖母が感じていたかどうかまでは気づいていないようではある。しかし、自分の言うことを聞く娘夫婦を従えている祖母にとっては、このように自分と同じく狡猾な権力者の資質を持つ文子の存在は、許しがたいものであったであろう。そして、このことは、手記の隅々まで読みこなす読解力と想像力を持つ読者には、十分理解できることであろう。

以上のように、近代の長編小説にあるような、小説の舞台となる地域社



会のパノラマを描く作家の卵としての手腕と、この神のごとき視点に表れた権力者としての資質、あるいは、体制批判者・変革者としての素質が、この場面一つを精読、分析しただけでも、うかがわれるのである。

### （3）自殺未遂と腰巻—手記と手紙

祖母一家の精神的身体的虐待に堪えかねた金子文子は、ついに自殺を決意し、1916年の夏に美江駅に近い踏切の土手の陰にうずくまって急行が来たら飛び込もうとするが、急行は通過した後だった。続いて、美江を流れる白川で入水自殺をすることを思いつく。恩師宛ての手紙では、短く語られているその出来事が、手記では、思い詰めた少女の心理と行動が切迫感をもって描かれている。すでに自伝の構想の芽生えについて検討した際に取り上げた、恩師宛ての手紙AとBに書かれた自殺未遂の顛末を、手記の描写と比較して考察してみたい。

A 先生が沃川に転勤されてから、盛夏の一日、自殺すべくヨンボ<sup>52)</sup>の踏切に行ったら、まだシグナルが下がって居なかったので、一目散に夢中で走って白川〔錦江〕の旧市場の桐の木の下で、ユモジを解いて付近の石を拾ひ集めて、それに包み、胴体に縛りつけた時のあのつきつめた気持は、昨年その縮みのユモジは破れてモウ影も形もなくなって、悲しいその思いで（ママ）ばかりがハッキリと残って居ります<sup>53)</sup>。（下線は引用者による）

B 先生が沃川に転任されたある夏の日自殺すべく付近の京釜線路に赴き、湯巻をとってそれに石を一杯包み胴体に縊りつけたあの冷たい気持ち。その湯巻は昨年影も形もありません。あゝ凡ては夢でした。

---

52) これは「京釜線」の「キョンプ」の誤植ではないと思われる。

53) 山田 302。

正義とは何？善とは何？この体験から見れば何の標準もありません<sup>54)</sup>。  
(下線は引用者による)

### 手記

急がなければ時間に間に合わない。風呂敷を脇の下に隠し持って、私は裏門から出た。そして夢中で走った。いっさいを捨てて、死の救いへと、すがすがしい晴れやかな心で……。

(中略)

土手の陰に蹲って私は汽車を待った。だがいつまで経っても汽車は来なかった。やっと私は汽車がもう通貨した後だということを知った。

それを知ると、私は、今にも誰かに追跡せられ、捕らえられるように思っ  
て気が気でなかった。

「どうしようか……。どうすればいいのか……」

澄みきった頭の働きは敏速だった。私はじきに今一つの途を思い出した。

「白川へ！ 白川へ！ あの底知れぬ蒼い川底へ……」

(中略)

心臓の鼓動がおさまると私は起き上がった。砂利を袂の中に入れ始めた。袂はかなり重くなったけれど、ややともすればそれが滑り出そうであったので、赤いメリンスの腰巻を外して、それを地上に展げて、石をその中に入れた。それからそれをくるくると捲いて帯のように胴腹に縛りつけた。

用意は出来た。そこで私は、岸の柳の木に掴まって、淵のなかをそおっと覗いて見た。

淵の水は青黒く油のようにおっとりとしていた。小波一つたっていなかった。じっと覗<sup>みつ</sup>めていると、伝説にある龍がその底にいて、落ち

---

54) 山田 302。

て来る私を待ち構えているように思われた。

私は何だか気味がわるかった。足がわなわなと、微かに慄えた。突然、頭の上でじいじいと油蟬が鳴き出した。

私は今一度あたりを見まわした。何と美しい自然であろう。私は今一度耳をすました。何という平和な静かさだろう。(170-172) (下線は引用者による)

引用の前半では、体罰としての食事禁止による空腹も忘れて、死んで楽になろうという思いに突き動かされて、一心に死に向かう心理が前のめりのスピード感をもって描かれる。入水するために重りの石をあちこちに仕込むあたりから、静かで深い淵をのぞき込むところで、語りの時間はゆっくりと流れて止まる。そこに、突然、油蟬の声が悟りを開いたしるしのよう聞こえて、文子の目に見えるものすべての見え方を変える。自然への感嘆、愛すべきもの、美しいものが無数にあることの気づき、世界は広いという発見である。死んだら祖母たちが嘘をついても申し開きができないことにも気づく。死んではならない、「私と同じように苦しめられている人々と一緒に苦しめている人々に復讐をしてやらねばならぬ」(172)という決意がなされる。この「苦しめられている人々」は、手記の中では麦ご飯をすすめてくれた朝鮮人のアジュモニや、祖母や叔母から面白いようにいたぶられていた下男の高という形で現れている<sup>55)</sup>ことが注意深い読者にはわかる。

手記の表現を、手紙の表現と比較してみよう。袂の中に砂利を入れて重りにしたことは手紙には出てこないが、洋装ならばポケットに、和装ならば袂に石を入れて確実に溺死するように入水するのは常套であるので、金子文子も実際にそうしたが、手紙には書かなかっただけかもしれない。彼女は袂の重りだけでは水に入ったときに身体から離れてしまいそうな

---

55) 岸野淳子「金子文子の恋愛」、『思想の科学』第7次(12)、32、1982年。

で、身につけていた腰巻を脱いで、石をくるみ、自分の胴体に縛りつけた。手記の「腰巻」は手紙Aでは「ユモジ」、手紙Bでは「湯巻」となっている。

この女性の和装の肌着は、地域によって呼び名が異なる時代もあり<sup>56)</sup>、「湯文字」や「湯巻」は女房言葉であるという指摘もある<sup>57)</sup>。

注目すべきは、この肌着の材質と色である。手紙Aには「縮みのユモジ」とあるが、手紙Bには材質についての記述がない。手記には「赤いメリンスの腰巻」とある。縮ちぢみは、縮織の略称で、生地全体に皺しぼ、絨しじらのある織物の総称であり、広義にはちりめんも含まれる。材質は綿、麻、絹、合織等があり、肌触りがよく、夏の衣料として使われる。単に縮と呼ぶ場合は、綿縮を指すことが多い<sup>58)</sup>。一方、メリンスはモスリンのことで、唐ちりめんとも呼ばれた。元来は木綿の薄手のものを指したが、柔らかい薄地の毛織物である。幕末から明治にかけては輸入品であったが、1897年頃から国産されるようになった。虫がつきやすいという欠点があり、今ではほとんど見られない<sup>59)</sup>。こうしてみると、「縮み」と「メリンス」を金子文子が同じ意味で使っていた可能性もあるが、「メリンス」は、輸入超過から輸出国へ、工業国家に成長した大正時代の日本の象徴とも言える。1911年には、日清紡績亀戸工場で女工のストライキ、1912年には三重紡績津分工場で女工ストライキ、1914年には東京モスリン女工のストライキがあったことも、後世の読者は、時代背景として念頭に置くべきであろう<sup>60)</sup>。金子文子が朝鮮に渡った前後のことである。工場法は1911年に発布されたが、労働組合は1945年12月まで非合法であった。

赤い腰巻にはどのような意味合いがあるのであろうか。女子が腰巻を身につけるのは、農村では一人前になったしるしであり、男子の〈禪祝い〉

---

56) 『故事類苑』服飾部 洋巻 第1巻, 1514。

57) 『世界大百科事典』。

58) 同上。

59) 『世界大百科事典』および『日本大百科全書』。

60) 鈴木裕子・亀田博作製「金子文子年譜」, 鈴木編 ①。

に対して、女子は13歳になると〈腰巻祝い〉〈湯文字祝い〉などといって、母親の実家や親戚から贈られた赤または白の木綿の腰巻を初めてつける習わしが各地で見られた<sup>61)</sup>。金子文子の半生記には、七五三や十三祝いのような、成長の節目を祝われる行事が全く出てこない。金子文子が13歳になったのは、朝鮮の岩下家での身体的精神的虐待が進んで自殺を試みた頃である。虐待やネグレクトがあっても、初潮を迎えた女子に腰巻を付けさせないわけにはいかず、この腰巻は13歳の祝いに母か母の実家から送られたとも、岩下家から与えられたとも考えられる。この場面では、彼女は遺体発見に備えて服装を整える自殺者の例にならって、「が、それにしてもこのままでは余りにも身窄<sup>みすぼ</sup>らしい。突嗟の間にも私はこう思いついた。そこで大急ぎで腰巻だけを取り換えて、部屋の隅の箱から、袂<sup>たもと</sup>のついた単衣<sup>ひとえ</sup>とモスリンの半幅帯とを引き出して、それを小さく折って風呂敷に包んだ。」(170)。腰巻は家で履き替えたが、とっておきの単衣には踏切近くの土手の陰で着替えたのである。

この後、自殺を思いとどまった金子文子は袂や腰巻に入れた石をすべて取り出して、希望という「憂鬱な黒い光」をまとい、学校で教わる以上の知識や、「この大きな大自然の中に、どんなことが行われているのか」を知りたいという欲望をもった、「うちに棘をもった小さな悪魔」となって岩下の家へ帰っていく(173)。子ども時代の残酷な終わりが冷徹な視点で描き出されている。

以上のように、手紙Aと手紙Bは原本がなく、別人（恩師の手紙を入手した新聞記者か？）の編集によって発表されたため、完全な一次資料としては扱いにくいという欠点を持つにもかかわらず、金子文子の遺した数少ない資料の中から、金子文子の声を時代の中で聞き取り、金子文子の作り出したテキスト（これが「金子文子」である）の全体像を受容し、「金子文子」について考える上で重要な資料となっているのである。

---

61) 『世界大百科事典』。

## 結 論

金子文子の手記を読んでその声に接した者はほとんどが次のような感慨を抱く。「これからどんな本を書いたひとだっただろう。／これからどんな思想を残せた人だっただろう。／日本という国は、このような女性を生かすことができなかった」<sup>62)</sup>。彼女は、作家にも思想家にも運動家にも政治家にも企業家にもなれたかもしれなかった。しかし、それどころか、金子文子の後ろには、自殺未遂が未遂で終わらず、虐待や貧窮や差別によって心身に傷病を負い、短い命を終わらせたり、死んだも同然の生涯を送ったりした、無名の若者が何人もいたことも、金子文子のテキストは想起してくれるのである。

彼らの無念を晴らす作業は、金子文子のテキストをコンテキストもろとも、精読し、分析し、今の私たちの状況と未来につなげて考察し続けることにしかない。

（本学文学部教授）

---

62) ブレイディ 35。